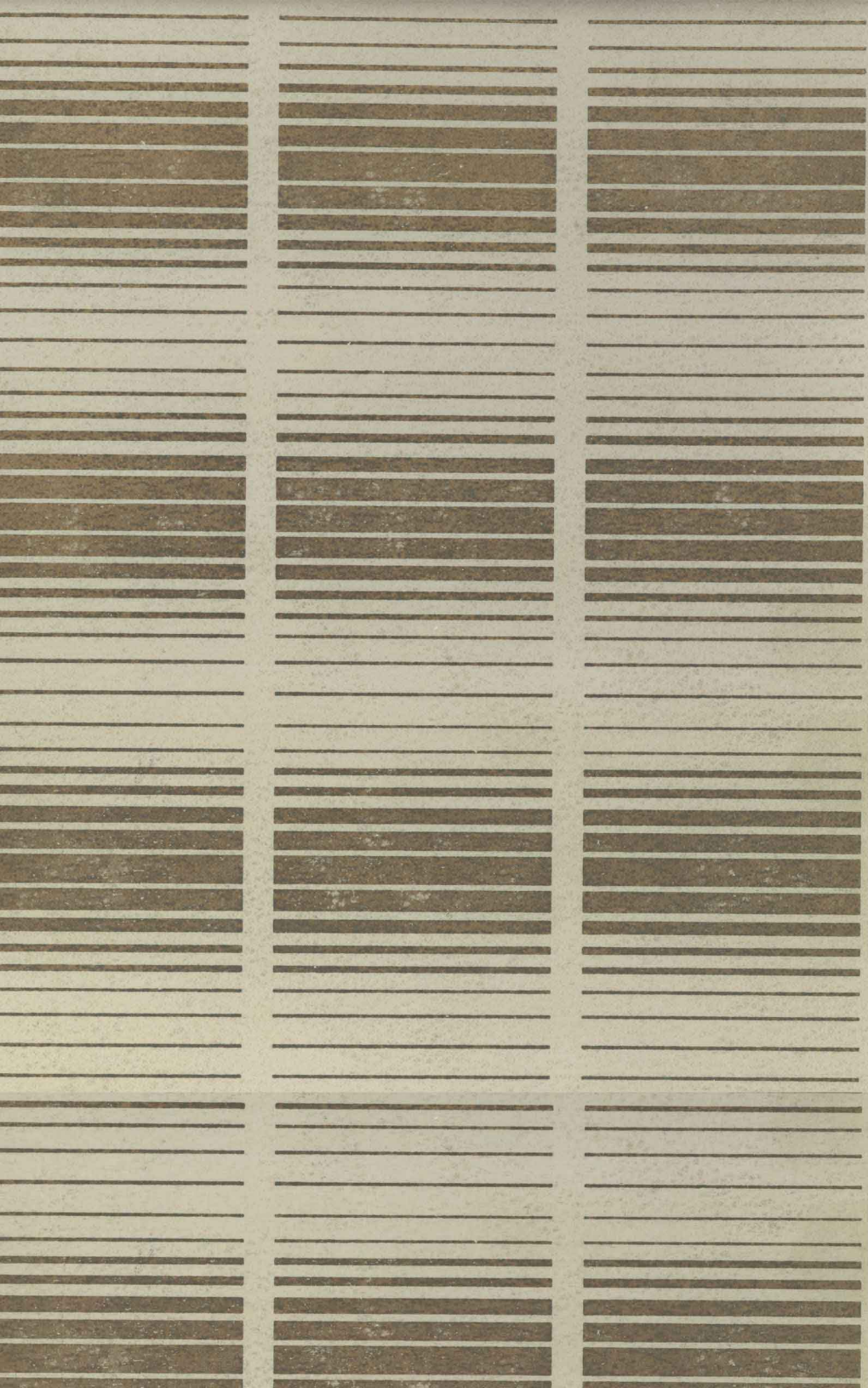




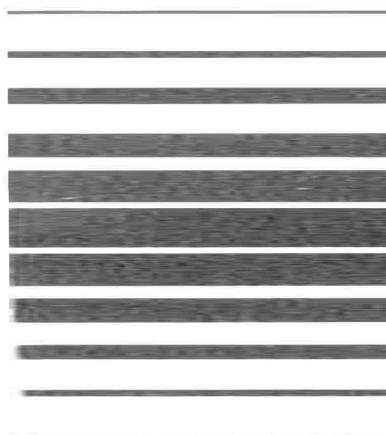
世界文学全集 14

アシャー館の崩壊^他

ポー

タイピー

メルヴィル



アシャー館の崩壊／黒猫

リジーア／ウィリアム・ウィルソン 他

タイビー

訳者 丸谷 才一

富士川義之

土岐 恒二



昭和51年3月25日初版

昭和51年11月5日2版

編集 株式会社 綜合社

101 東京都千代田区神田神保町3-6-5

電話 東京(239) 3811

発行者 堀内 末男

発行所 株式会社 集英社

101 東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話 出版部03(230) 6361 販売部03(230) 6171

印刷 凸版印刷株式会社

製本 中央精版印刷株式会社

目次

ボ
ー

リ
ジ
ー
ア

ア
シ
ャ
ー
館の崩壊

ウ
イ
リ
ア
ム・ウ
ィ
ル
ソ
ン

群
集
の
人

モ
ル
グ
街の殺人

メ
エ
ル
シ
ュ
ト
レ
エ
ムの底へ

赤
死
病の仮面

黄
金
虫

黒
猫

落
し
穴と振子

盗
ま
れた手紙

富士川義之訳 5

丸谷才一訳 20

富士川義之訳 35

富士川義之訳 54

丸谷才一訳 62

富士川義之訳 89

富士川義之訳 104

丸谷才一訳 110

丸谷才一訳 139

富士川義之訳 147

丸谷才一訳 161

メルヴィル

タイピ―

後記・注解

解説

年譜

著作年譜

土岐恒二訳

富士川義之／土岐恒二

177

401

405

423

431

リジーア

アシャー館の崩壊

ウィリアム・ウィルソン

群集の人

モルグ街の殺人

メルシュトレエムの底へ

赤死病の仮面

黄金虫

黒猫

落し穴と振子

盗まれた手紙

リジーア

そしてそのなかに意志が存在するが、これは死に絶えることがない。力強さをそなえた、この意志の神秘のかずかずを知る者が果たしているだろうか？ なぜなら、神とはその本性たる集中力によって万物に浸透する大いなる意志にほかならないからだ。人間はただ弱い意志という弱点によらぬ限り、天使にも、また死にも完全に屈服するものではない。

ジ・ゼフ・グランヴィル*

リジーアという淑女と初めて知合いになったのはどのようなにしていたのか、いつ頃だったのか、また正確にはどこでだったのかさえ、わたしにはまるで思い出せない。あれから長い歳月が経過し、数多くの苦しみを嘗めたために、わたしの記憶力は衰えている。あるいはことによると、わたしがいまこういうことを思い起こせないのは、実のところ、わが恋人の性質、世にも優れたその学識、特異ながらも穏やかなその美貌、さらには低い音楽的な言葉の、人の心を感動させう

つとりさせずにはおかぬ表情の豊かさが、きわめて徐々に、いとも忍びやかにわたしの心に入り込んでいたため、いつ、どのようにしてなどということはもはや顧みられることもなく、忘却の淵に沈んでいけるせいなのかもしれないのだ。けれども、わたしが最初に、そしてその後もきわめて頻繁に彼女に会ったのは、ライン河の近くの、ある大きな、古い、朽ちかけた町だったと思う。その家柄については——彼女がその話をするのを確かに聞いたことがある。遠い昔からの家柄であることは疑いない。リジーア！ リジーア！ わたしは外界の印象を弱めるのに何よりも有効な性質をそなえた研究に没頭しているのだが、あの甘美な言葉だけは例外で——リジーアと口ずさむだけで——いまはもうこの世にいない彼女の姿がわたしの眼前に鮮やかに浮かび上がってくるのである。ところでいま、こう書いているとき、ふと思ひ出したのだが、わが友にして婚約者、のちにはわたしの研究の伴侶となり、ついにはわが最愛の妻となった彼女の父方の姓を、わたしはまるで知らないでいたのだ。わたしがこの点の調査を始めたのか、それしたのは、リジーアが戯れにそう命じたためなのか、それともわたしの愛情の強さをためすためだったのだろうか？ あるいはむしろわたし自身の気紛れとか——この上もなく熱情的な献身の神殿に捧げる物狂おしいロマンティックな供物のせいだったのだろうか？ わたしには事実そのもののさえないやりとしか思い出せない——だから、その発端となった、あるいはそれに付随していたいろんな事情をわたしがすっかり忘れてしまっても別に不思議ではあるまい。しかも、

本當に、もしあのロマンズと名づけられている精霊——偶像崇拜の地エジプトの、あの陰気で霧の翼を持つ女神アシュトファエトが、言い伝えのとおり、不吉な結婚をつかさどるものなら、わたしの結婚をつかさどっていたのも紛れもなくこの女神であつたに違いない。

しかしながら、これだけは記憶に残っている懐かしい思い出が一つある。それはリジーアの容姿だ。背は高く、幾分ほっそりしていて、晩年には、痩せ衰えさえていた。その威厳に満ちた、物静かでゆつたりとした立居振舞、あるいはその足取りの計り知れぬ軽さとしなやかさを言葉で描こうとしても結局は無駄骨を折ることになろう。彼女は影のように訪れ、影のように立ち去って行つたのだ。締め切つたわたしの書斎のなかへ彼女が入つて来ても、大理石のような手がわたしの肩の上に置かれ、懐かしい音楽のような、低い甘美な声で囁きかけてくるまでは、彼女に気づいたためしはなかった。顔の美しさにかけては、どんな乙女も彼女に及ばなかった。それは阿片夢に恍惚としたようにまばゆいばかりに輝き——デロスの巫女たちが神がかりの状態に陥つたときにその魂につきまとう幻想よりも遙かに激しくも神々しい、この世のものとも思えぬ、精神を高揚させるような美しさだった。けれども、彼女の顔だちは、異教徒の古典的労作によって誤って崇拜するように教え込まれて来た、あの均斉の取れた造りではなかった。「絶妙な美しさには必ずどこか、均斉の面で奇異などがあるものだ」とは、ヴェルラム卿ベーコンが、美のあらゆる形態と種類について正しく言い当てた言葉であ

る。しかし、リジーアの顔だちが古典的な均斉の取れた造りではなく——その優美さがまことに「絶妙な」ものであることを認め、そこに「奇異なところ」が多分に行き渡っていることを感じていたとはいえ、いざその不均斉な点を見つつけ出そうとすると、あるいは「奇異な」という自分自身の感じをできるだけ突きとめようと骨折る段になると、結局無駄に終わるのだった。その広く蒼白い額の輪郭を調べてもみた——それは完璧だった——だが、それほどにも神々しく威厳に満ちたものに、完璧という言葉を当てはめるとき、まことにその言葉の何とよそよそしく響くことか！ この上もなく純白な象牙にも匹敵する肌の色、その色の犯しがたい広がりと落着き、こめかみの上のあたりのゆるやかな隆起、それからわたり鳥の濡れ羽のように黒く、つややかで、ふさふさとした、おのずから巻き毛状にちぢれた頭髮は、「ピアシンスの花のようにふさふさとした」(第六卷三二行)という、ホメーロス風の形容辞の真意を明らかにするものだった。わたしはまた繊細な鼻の輪郭を眺めた——これと同様な完璧さはただヘブライ人たちの遺した優美な円形浮彫り肖像画のなかでしか見たことがない。そこにはこれと同じようなふつくらとして滑らかな肌理があり、ほとんど気づかれないほどかすかに鉤鼻になろうとする同じような傾向があり、また同じような調和を保って彎曲する鼻孔は、自由な精神を表わしていた。わたしはその美しい口を見つめた。ここには実際、すべて天上的なものの極致があつた——短い上唇の見事な形——下唇の柔らかく、肉感的な微睡——笑窪は戯れ、その色は語り——齒

は、静かで穏やかな、しかも喜びに踊らんばかりに輝く微笑のたびに、そこにこぼれ落ちる聖なる光の一つ一つを、いさかかはっと思わせるほどの輝きを帯びて、きらりと反射するのだった。わたしは顎の形にもじっと視線を注いだ——そしてここにもまた、ギリシア人に見られるような温和な広がり、柔らかさ、威厳、豊かさ、そして精神性があつた——それはアポロの神がアテナイの人クレオメネスに、ただ夢のなかでのみ明らかにして見せたという輪郭だった。それからわたしはリジーアの大きな眼を覗き込んだ。

眼については、遠い大昔にもその範例が見当たらないほどである。ことによるとヴェルラム卿が指摘した美の秘密は、わたしの恋人の二つの眼のなかにひそんでいたのかもしれない。その二つの眼は、確かに、われわれの民族の平均的な眼よりも遙かに大きかった。それらはヌーアジャハードの谷間に住む種族の羚羊に似たつぶらな眼よりもいっそうつぶらでさえあつた。けれども、こうした特徴が、リジーアの場合、いさかかでも人目につくようになるのは、ただ時折のことだけ——つまり激しく興奮した束の間のあいだのみに限られていた。そしてそのような瞬間の彼女の美しさは——おそらくわたしの空想が激しく燃え上がるあまりそう見えたのかもしれないが——この世を超越した、あるいはこの世から離れた存在の美しさ——トルコの伝説の天女の美しさにほかならなかった。瞳の色はいとも鮮やかな黒色で、その遙か上にはすこぶる長い黒玉色の睫毛が垂れていた。眉毛は、輪郭が幾分不揃いだが、やはり同じ色合いを呈していた。しかしながら、

わたしが眼のなかに見出した「奇異なところ」とは、その形とか、色とか、あるいは眼もとの輝きとかとは別種のもので、つまるところその表情に含まれているものとせねばなるまい。ああ、意味のない言葉よ！ 単なる言葉の音の茫漠たる広がり背後に、われわれはおおかたの精神的なものに対する自らの無知を何と巧みに隠しおおしていることだろうか。リジーアの眼の表情！ どんなに長いあいだ、わたしはそれについて思いをめぐらしてきたことか！ 真夏の一夜を徹して、その深さを測り知ろうとして、どれほどやっきになったことか！ あれは一体何であつたろうか——デモクリトスの井戸よりももっと深いその底にひそんでいたものは——わたしの恋人の瞳の底深く宿っていたものは？ あれは一体何であつたろうか？ わたしはそれを発見したいという情熱に取り憑かれた。あの眼！ あの大きな、きらきら輝く、神々しい瞳！ それらはわたしにとってレダの双子宮の星となり、一方わたしはその二つの星に仕えるいとも敬虔な占星術師となつたのだ。

心の科学では不可解で異例なことは数多いが、とりわけ最も興味をそそられるのは——学界ではまるで注目されていないようだが——長いあいだ忘れていたことを何とか思い出そうといういろいろやってみるとき、いまにも思い出せそうである。結局は思い出せずに終わることがあるという事実である。そしてこれと同じように、リジーアの眼を真剣に見つめてるとき、その表情をいまにも完全につかめそうな気がしながら——それでいてやはりいまひとつはつきりとはつかめず——

結局は全然つかめずに終わるということが、どんなにしばしばあったことだろうか！ だが（不思議なことに、おお、まことに何よりも不思議な神秘であったことか！）この宇宙のごくありふれた事物のなかに、わたしはあの表情に似通ったものをかずかず見出すのであった。つまり、リジーアの美しさがわたしの精神のうちにいつのまにか入り込み、そこを聖堂のようにして住みついたとき以来、わたしは物質界における数多の存在から、彼女の大きく明るい瞳がわたしの心のかにいつも撞き立ててくれるような気がしたのと同じ感情を獲得するようになったのである。と言っても、その感情をより明確に定義できたわけでも、分析や、それをじっくり見きわめることすらできたわけでもなかったのだ。繰り返しになるが、わたしはすぐと成長する葡萄の蔓を眺めるとき——蛾を、蝶を、蛹を、流れ行く水をじっと見つめるとき、その感情を抱いた。わたしは海洋に、落ちる流星にその感情を抱いた。桁外れに年取った老人の眼差しにそれを感じたこともある。それから望遠鏡で天体を観測している際にも、わたしがその感情を撞き立てられることに気づいた星が一つか二つあった（とりわけ、琴座の大きな星（ベータ星）の近くに見出される、変光性の二重星である六等星がそうだった）。弦楽器の奏である種の音にも、またしばしば書物のなかの一節によっても、そのような感情に充たされた。他にも数知れぬほど例があるが、なかでもわたしがよく憶えているのは、ジョゼフ・グランヴィルのある書物の次のような一節であって（おそらくただその風変りのせいかもしれぬが）、それはいつも

きまってその感情を呼び起こすのだった——「そしてそのなかに意志が存在するが、これは死に絶えることがない。力強さをそなえた、この意志の神秘のかずかずを知る者が果たしているだろうか？ なぜなら、神とはその本性たる集中力によって万物に浸透する大いなる意志にほかならないからだ。人間はただ弱い意志という弱点によらぬ限り、天使にも、また死にも完全に屈服するものではない」

長い歳月が経ち、そのあいだにいろいろと思ひめぐらしているうちに、この英国のモラリストの言葉とリジーアの性格の一面とのあいだに、実のところ、ある遠い繋りがあることをつきとめえたのであった。思考や行動や言葉づかいの激しさは、彼女の場合、たぶんあの巨大な意志の一つの結果であり、あるいは少なくとも一つの指標であっただろうが、わたしたちの長い交際のあいだには、例のもっと直截なその存在の証を示すことはなかったのである。わたしがかつて知りえたすべての女性たちのうちで、彼女こそ、外見は穏やかで、いつも落ち着いていたリジーアこそが、恐るべき禿鷹のような仮借ない情熱に、この上もなく激しくわが身を捧げていたのである。そしてそのような情熱についてはただ、わたしをひどく喜ばせると同時に怯えさせもしたあの驚異的に大きく広げられた眼——彼女のたいそう低い声のほとんど魔術的と言ってもよい旋律、抑揚、明快さ、静けさ——それに彼女がいつも口にする激烈な言葉（これはその穏やかな話しぶりとの対照によって二重に効果的なのだが）の持つ恐るべき力強さによってしか判断の下し方がなかったのである。

リジーアの学識についてはすでに述べた。それは測り知れぬくらいのもので——女性ではかつて他に類例を見ないほどである。古典語に造詣が深く、近代ヨーロッパの諸国語についても、わたしの知識の及ぶ限り、彼女が誤りを犯した例を知らない。実際、学界が誇る学問のうちで、単に最も難解という理由だけで、賞讃をほしきままにしているようななどな論題であろうとも、リジーアがかつて誤りを犯したことがあったろうか？ わたしの妻の特徴のうちでこの一点が、最近になって初めて、何と奇妙に——何と心ときめかすほどに、わたしの注意を強く惹きつけることだろうか！ 彼女の知識が他に類例を見ないほどのものであることはすでに述べたが——この世の男性でも、精神科学、自然科学、数学などの広汎な全領域を、あれほど見事に踏破した者がいるだろうか？ 当時のわたしは、いまでこそはっきり認めていること、つまりリジーアの学識が該博をきわめ、驚嘆すべきものであることに気づいていなかった。けれども、わたしたちの結婚生活の当初において、わたしがすっかり没頭していた形而上学研究という混沌たる世界への導師として、子供のような信頼感を抱いて彼女にわが身を委ねたのは、彼女のほうが限りなく優れていることに十分気づいていたからである。めったに探求されることもなく——ましてや知られることもさらに少ない研究に打ち込むわたしに彼女がついて来てくれたとき、わたしはそれほど大きな勝利感と——どれほど強烈な喜びと——またどれほど天上的で溢れる希望とともに、感じたことだろうか。眼前に素晴らしい眺望がおもむろに開け、その長

く、目くるめくような、しかも人跡未踏の道を辿ってゆけば、やがては、あまりにも神聖で貴重であるからといって、決して禁断とはされていけない叡智という窮極の目標に達しうるのではあるまいか！ と。

それだから、数年後に、この十分に根拠のある期待が翼をつけて飛び去るのを見たとき、わたしの悲しみはどんなにか痛切なものであったろうか！ リジーアがいなければ、わたしはまるで夜の闇のなかで手探りする子供のようであった。彼女が傍にいてくれるだけで、彼女が本を読んでもくれるだけで、わたしたちが熱中していた超越主義哲学の数多い神秘に鮮やかな光が当てられたもののなかに、彼女の眼のまばゆいばかりの輝きが消えると、優しく光る金色の文字も、暗鬱な鉛よりもなお鈍い鉛色と化するのだった。そしていまやあの眼がわたしが熱心に読みふけるページに光を当てることはますます稀になった。リジーアは病氣になったのだ。怪しく輝く眼はあまりにも——あまりにも燦然たる光彩を放って燃えた。蒼白い指は死人のような、透き通った蠟色を呈し、その広い額に浮き出た青い静脈は、ごくかすかな感情の波にも激しく脈打った。彼女は死ぬに違いないことを、わたしは知った——そこでわたしは心のなかで冷酷なアズラエルと必死に闘った。が、情熱的な妻の闘いのほうが、わたしが驚いたことには、わたしにもましてずっと激しくさえあったのである。彼女の厳しい性質のうちには、彼女にとって、死は恐怖を伴うことなく訪れるものではあるまいかという信念をわたしに植えつけさせるようなところが多分にあったのだが、実際は

そうではなかったのだ。彼女が「死の影」と格闘する際の抵抗のすさまじさは、どんな言葉も無力すぎて正しく伝えることなど到底できないのである。その痛ましい光景に、わたしは叫び苦しむのであった。できることなら、慰めてやりたかった——道理を説いてもやりたかった。だが、生きたいという——ひたすらに——ただひたすらに生きたいという彼女の狂おしいばかりの欲望の激しさを前にしては、慰めも、道理を説くことも等しくこの上もない愚行としか思えなかった。

だが、荒れ狂う彼女の魂は、発作的に激しくもだえ苦しみながらも、息を引き取る瞬間まで、その態度のうわべの静けさまでが乱されるということとはなかった。彼女の声はますます穏やかに——ますます低くなっていた——が、物静かに発せられるその言葉の狂おしいばかりの意味を、わたしはいまここであれこれ述べたいとも思わない。だが、人間のものととはとても思えぬ声の調子——人間がまだかつて、一度も知らなかったような、かずかずの臆説や熱望を語る言葉にうっとり耳を傾けていたとき、わたしは目くるめく思いだった。彼女がわたしを愛してくれていたこと、それは疑いようもなかった。だが、彼女のような女性の胸中にあるのは、愛が並外れた情熱となってそれを支配するものであることに、わたしはもっと早く気づいてしかるべきだったであろう。しかし、死際になって初めてわたしは、彼女の愛情の強さにすっかり感動させられたのだった。長いこと、わたしの手をじっと握ったまま、彼女は心に溢れる思いを吐き出すのだったが、その並みなみならぬ献身の情は偶像崇拜にも等しかった。が、

そのような告白にかくも恵まれるだけの値打ちが、そもそもこのわたしにあったらどうか？——しかも彼女がそのような告白をしたまさにそのときに、愛する妻を奪われるとは、それほどわたしは呪われた人間なのだろうか？——しかし、こうした問題については、これ以上詳しく述べるなどとてもできるものではない。が、これだけは言っておきたい。つまり、並外れた女性でなければ到底できぬ、リジーアの愛する者への献身、ああ！——それはいかにも度を過ぎた、いかにも不相応に捧げられた愛する者への献身だったのだが、そこにわたしがついに認めたのは、彼女の願望の根源にあるもの、すなわちいまや刻一刻消えなるとする生命を求めようとする狂おしくも真剣な欲求にほかならなかった、ということである。この狂おしいばかりの願望——生きたい、ただひたすらに生きたいというこの欲求のすさまじいばかりの激しさこそは、わたしにそれを描くだけの能力や——表現しうる言葉の欠けているもののなのだ。

彼女がこの世を去ったのは真夜中だったが、そのとき彼女は厳かにわたしを自分の傍に呼び寄せて、つい数日前に彼女自身が作ったある詩を暗誦して聞かせるようにと命じのだった。わたしはそれに従った。——それは次のような詩である。

見よ！ 今宵は祭礼の夜ぞ、
寂しき最後の年月の！
天使の群れが、翼をつけ、

ヴェールを飾り、涙にくれて、
劇場に坐して見るものは

希望と恐怖の劇、

管弦楽が途切れがちに奏するは

天体の音楽。

天にいます神の姿に造られし道化役者たちは、

ぼそぼそと低くつぶやき、口ごもりつつ、

ここ、かしこと飛びまわれども――

ただの操り人形にすぎずして、その行き来は
形なき巨大なものの命ずるままなり。

そがあちこちに舞台を移し、

禿鷹の翼を羽搏きて放つは

見えざる「悲哀」ぞ！

その道化芝居を――おお、心して

忘れまじや！

群集はその大いなる「幻」を永遠に追い求めしが、

ついにとらえるに至らず、

一回りしていつも戻るは、

同じ場所なれば。

数多の「狂気」、それにもまさる「罪」と

「恐怖」こそこの劇の精髓ぞ。

さあれ見よ、この道化の群れのなかに、

這い寄り来るもののあるを！

血のごとく赤きものたうち来る

舞台の奥より！

そはのたうつ！――また、のたうつ！――道化役者たちは

死の苦しみとともに、その餌食となりぬ、

天使たちは嚙り泣く、人間の血に

汚れし毒牙を眼にして。

消えり――すべての燈火は消えり――すべては！

戦慄ける各人の上に

幕が、棺衣が降りる

嵐のごとき猛烈な勢いで。

天使たちはみな顔蒼ざめて、

席を立ち、ヴェールを取りて、かく断言せり、

この劇こそは「人間」という悲劇、

その主人公は征服者たる「蛆虫」なりと。

わたしがこれらの詩句を暗誦し終わると、リジーアは跳び
起き、その腕を痙攣的に高く差し広げ、なかば悲鳴に近い声
で「おお、神よ！」と叫んだ。「おお、神よ！ おお、父な
る神よ！――このようなことが、変わることもなくつづいてよ
いものでしょうか？――この「征服者」は一度たりとも征服
されることはないのでしょうか？ わたくしたちは、神であ
られるあなた様の大切な一部ではないのでしょうか？ 一体
誰が――力強さをそなえた、意志の神秘のかずかずを知って

いるでしょうか？人間はただ弱い意志という弱点によらぬ限り、天使にも、また死にも完全に屈服するものではありません。」

それから、激しい感情の高ぶりに疲れ果てたように、彼女は白い腕をだらりと垂らし、厳かに死の床へと戻って行った。そして最後の息を引き取るとき、それに混じって唇から低いつぶやき声が洩れて来た。わたしがその唇に耳を寄せると、ふたたびグランヴィルの文章のあの末尾の言葉がはつきりと聞き取れた——「人間はただ弱い意志という弱点によらぬ限り、天使にも、また死にも完全に屈服するものではありません。」

彼女は死んだ。——そしてわたしは、まったく悲しみに打ちひしがれていたので、ライン河のほとりのくすんだ、朽ちかけた町にある住居の寂しさや惨めさにはもはや堪えきれなくなっていた。わたしは世間の人たちが財産と呼んでいるものに不足はしていなかった。リジーアは普通の人間にはとても得られぬような莫大な財産をわたしにもたらしてくれたからである。それゆえ、数カ月にわたる、物憂げであてどもない放浪の旅のあと、うるわしの英国の、すこぶる荒れ果てた、人の訪れることも稀な地方の一つで、その名は伏せておくがある修道院を購入し、それに幾らか修理の手を加えたのである。その建物の陰鬱にして荒涼たる雄大さ、その領地のほとんど未開とも言ふべき景観、この二つにまつわる数多くの物悲しい、古色蒼然たる伝説などは、この遠い人里離れた田園の地にわたしを追いやった完全な自暴自棄の気持と通

ずるところが多分にあった。けれども、朽ちかかったところに青い蔦のからまつている修道院の外観にはほとんど手を加えることはなかったのだが、子供じみた頑固さのゆえか、それにおそらくは自分の悲しみを軽減しようとするはかない望みも手伝ってか、建物の内部は王侯をも凌ぐほど壮麗に飾り立てたいという気になったのである。——すでに子供の頃にも、そうした途方もなく馬鹿げた建築趣味に染まっていたのだが、悲しみのあまり毫碌でもしたのか、それがいまや戻って来たのだ。豪華で幻想的な壁掛け、厳肅なエジプト彫刻、不規則な蛇腹や家具、金色の総飾りのついた絨毯の気違いじみた模様——ああ、いまにして気づくのだが、それらのうちには狂気の兆候さえもが多分に認められたかもしれないのである！わたしはすでに阿片という足枷で縛られた奴隷となり、自分のなすこと、命ずることも、阿片夢の色調を帯びているのだった。だが、こうした愚行のかずかずをいまくどくどくと述べている暇などない。ここではただ、あの一つの部屋、永遠に呪われた部屋についてのみ語っておこうと思う。精神に変調を来したときに、その部屋へ、わたしが——あの忘れられぬリジーアの後継者として——金髪碧眼のトレメインの淑女ロウイーナ・トレヴァニオンを、教会の祭壇からわたしの花嫁として連れて来たことについて。

あの花嫁の部屋の構造、装飾のどれ一つとして、いまわたしの眼前にありありと浮かばぬものはない。黄金に眼がくらんだためとはいえ、あれほどに可愛がっていた処女なる娘に、あのように飾り立てられた部屋の敷居をまたぐのを許すとは、

花嫁の一族はその誇り高い魂を一体どこにやったのだろうか？ わたしはその部屋の隅々にいたるまでいちいち細かく憶えていることはすでに述べた——けれども、もっと重要な事柄については残念ながら忘れていたのだ——と言うのも、

この部屋の風変りな飾りつけには、しかと記憶に残るような方式とか、調和とかいうものがまるでなかったからだ。その部屋は城郭風の修道院の高い小塔のなかにあり、形は五角形で、ゆったりとしていた。この五角形の南向きの面全体は、一つの窓で占められていて——ヴェネチア製の一枚の巨大な、ひび一つないガラスが嵌め込まれていたが——その一枚張りのガラスは、鉛色に着色されていたので、日光にせよ、月光にせよ、それを通して射し込むと、室内のものはみな無気味な光沢を帯びるのだった。この巨大な窓の上部には、年数を経た葡萄の蔓が格子細工のように広がり、どっしりとした小塔の壁の上を這い上がっていた。陰気に見える樺材で作られた天井は、法外に高く、アーチ型をなし、しかもなかばゴシック風、なかばドゥルイド風の、すこぶる異様でグロテスクな意匠の格子模様が念入りに施されていた。この陰鬱な円天井の一番の中心部から、長い環をつなぎ合わせた一本の金の鎖が垂れ、それにはやはり金製の巨大な香炉が吊り下げられていたが、これにはサラセン風の模様が施され、数多くの孔があけられていたので、そこから色とりどりの焰が絶え間なく、まるで生きた蛇のようにのたくりながら出たり入ったりしているのだった。

東方風の様式の長椅子と大燭台が幾つか、室内のいろんな

場所にあった。それからまた寝台——花嫁の寝台もあった。

これはインド風の様式で、丈は低く、硬い黒檀には彫刻が施され、棺衣に似た天蓋でおおわれていた。部屋の片隅にはどこにも黒御影石の巨大な石棺が直立して立っていたが、それらはルクソール（ナイル河畔の町。古代）の真向いにあるエジプトの王たちの墓から運ばれたもので、その古びた蓋には一面に遠い昔の彫刻が刻み込まれていた。しかし、この部屋の壁掛けのなかにこそ、ああ！ 何ものにもまさる幻想的なところがあったのだ。途方もなく高い——不釣り合いなほど高い——壁面には、天井から床まで、重々しい、いかにもどっしりして見える綴れ織が、幾重にも襷をつくって垂れ下がっていた——この綴れ織の生地は、床の上の絨毯や、長椅子や黒檀の寝台の被いや、寝台用の天蓋や、さらには窓の一部をおおっている豪華な渦巻き模様のカーテンの布地としても用いられていた。その生地は豪奢きわまる金糸入りのもので、そこには一面に直径一フィートほどのアラベスク模様風のものが、不規則な間隔を置いて散らばり、それらは漆黒の絵模様となるように布に細工されていた。しかし、この模様がアラベスク模様としての本性を示すのは、ある一つの視点から眺めたときだけに限られる。いまではありふれたものとなっているが、実際、その起源を遠い遠い古代にまでさかのぼることのできる仕掛けによって、それらは眺める位置に応じて変化するように作られているのだ。部屋に一歩足を踏み入れると、それらはただもう奇怪なばかりに見える。だが、さらになお進みつづけると、こういう感じは次第に消えてゆく。つまり、

部屋のなかを一步進むごとに位置が変わるにつれて、ノルマン人の迷信にあるような、あるいは修道僧の悪夢に出て来るような恐ろしい外形をしたものの果てしない行列に、自分を取り囲まれていることに気づくのである。この魔術幻燈的な効果は、壁掛けの背後からたえず人工的に吹き送られる強い風の流れによって著しく強められ——壁掛け全体に無気味で不安な活気のようなものを与えていた。

こうした広間で——このような新婚の部屋で——わたしはトレメインの淑女とともに、罪深い蜜月の一月を過ごしたのだ——ほとんど何の心配事もなく過ごしたのである。妻が激しくもむら気なわたしの気性を恐れていたこと——彼女がわたしを避け、ほんの少ししか愛していないことに——わたしは気づかないではいられなかった。が、それはかえってわたしに喜びを与えたほどである。わたしは人間のものというよりもむしろ悪魔のものと思われるような憎悪を抱いて、彼女を激しく憎んだ。わたしの思い出は（おお、何という強烈な後悔の念を伴ってであろうか！）リジーアのもとへ、愛するひと、やんごとなきひと、美わしのひと、墓に眠るひとのものとへと飛び戻っていったことか。彼女の純潔さ、彼女の叡智、気高い、天使のような彼女の性質、情熱的で、偶像崇拜的な彼女の愛を回想することに、わたしはひたすら耽ったのであった。するとそのとき、わたしの心は、かつての彼女の情炎よりもいっそう激しく、熾烈に燃え上がるのだった。阿片夢に神経を高ぶらせ（わたしはこの麻薬の足枷に始終つながれていたのだが）、夜の静寂のなかで、あるいはまた白昼の谷

間の奥まった場所で、大声を挙げて彼女の名を呼んだ。まるで、故人への気違いじみた熱愛、真面目な情熱、わが身を焼き尽すほどの激しい憧れを通じて、彼女が見棄てた——ああ、果たして永遠にだろうか？——この地上の道へ、ふたたび彼女を連れ戻すことができるかのように。

結婚後二月目の初めころ、ロウィーナは急病に襲われ、その恢復は手間どった。熱病でやつれ、そのために夜の安らかな眠りも奪われた。そして半睡半醒の不安な状態に陥り、小塔の部屋のなかや、そのまわりで、物音がするとか、何やら物の動く気配がするとか口走るのだったが、それは彼女の病的な空想のせいとか、それともたぶん部屋自体の魔術幻燈的な影響のせいだろうと、わたしは結論を下した。やがて彼女は快方に向かい——ついに、全快した。だが、それもほんの短いあいだだけで、二度目の、前よりもいちだんと激しい発作に見舞われ、苦しみの中に臥すこととなった。そしてともと虚弱な彼女の身体は、この発作から完全に恢復することはなかった。このとき以後、彼女の病状は予断を許さぬ性質のものとなり、さらになおいっそう予断を許さぬほど発作も頻繁に起こり、医者たちの知識も大変な努力も何の役にも立たなかった。明らかに、人間にできるあらゆる手だてを講じても根治できないほどに、こうして彼女の身体にしかと取り憑いて離れないかに見えるこの持病の進むにつれて、彼女の気分もだんだん苛立ちやすくなり、ほんのちょっとしたことにもすぐ脅えて興奮するようになってゆくのを、わたしは気づかずにはいられなかった。彼女はふたたび、以前口にしたよう